

へて)本索引の體例が如何に優れたものであり、如何に便利なものであるのか、勝覽に就いて知る處僅少でしかない私の詳しく紹介し得る限りではないが、一見して感じ得る本索引の整然たる組成が決して單なる思ひつきなどによつて出来たものでないことは、「新增東國輿地勝覽索引の作製といふことは、或る意味では勝覽の分解作業である。その分解作業に着手する以上は、先づ徹底的に分解を遂行しなければならぬ。そしてそれと同時に、それを單なる分解に終らしめず、分解に基づく再建の作業にまで到達せしむ可きである。これは私が索引カード整理中に深く植まつけられた心得であつた」と述べられた氏の明徹な索引編纂觀に明らか

に看取り得るであらう。かゝれば氏が更に「新增東國輿地勝覽の索引といつても、その編者によつていろ／＼の形のものが作られるであらう。こゝに公刊する索引は、その可能なる幾種かの形の中の一つに過ぎないのみならず、この形をとるにしても、これのみで満足すべきものとは思はれない。故に私は本書を索引の正編とし、なほ他日續編の編輯を企圖して居るわけである」と言はれた壯々な意圖も力強い抱負も、本書を十二分に意義付けるものとして聞き得るであらう。而してかゝる所言の下、既にその可能なる幾種かの形の一つである末松氏型索引の見事に浮塚されてあることを見ると同時に、かゝる心得乃至意圖が常に如何なる索引編纂者にも最も望ましいものゝ一つであることを言つておき度い。ともすれば平板と無味とに墮り易い索引編纂事業は必ずや如斯き心得及び意圖の下に脈々たる臆吹きと意義とを味得することであ

らう。

氏の本索引を編む、全く多忙な本務の餘暇を以てせられたものだといふ。讚嘆の念を禁じ得ないと同時に、こゝにも亦索引編纂者の考ふ可く學ぶ可き態度の存することを伺はねばなるまい。

尙最後に、私一個の大きな喜びを卒言として頂き度い。それは本索引の據本として、朝鮮史學會刊行の勝覽が使用されたといふことだ。同本の校閲は私亡父の携はつたところなのである。同本を所持せられる方は本索引を、又本索引を入手せられた方は必ず同本を具へられなければ役立たない。(菊判、本文六〇〇頁、解説——新增東國輿地勝覽とその索引——三〇頁、昭和十二年三月朝鮮總督府中樞院發行、定價未詳)(今西春秋)

西甘肅の蒙古方言研究 第三 蒙佛辭書

Le dialecte monguor parlé par les mongols du Kansou occidental. III^e partie, Dictionnaire monguor-français par A. de Smedt, C. I. C. M. et A. Mostaert, C. I. C. M. Pei-ping, 1933, pp. XIV+521.

甘肅西部の西寧の東北ナリソゴルのアリマ・ハンシャルに話さるゝ蒙古方言は、スメト及びモステルト兩師の研究題目となり、其の音韻論はアントロポス誌上に、其文法論はアジア・マヨル誌上に夙に發表され、又其概論は北京輔仁大學雜誌に出でたが、引續いて本辭書を世に貽り、更に昨年かには歌謡集を出し、其紹介

批評は善隣協會調査月報に見えてゐた。だから編輯者の強制に出づるとは云へ、今更茲に本書を紹介するも面はゆき心地がするを禁じ得ない。

本書は編者が謙遜して辭書ではなく、單なる語彙に過ぎないと稱するが、世に所謂辭書ではなく、蒐集せる語彙を諸方言に比較研究せる立派なる辭書である。一語を擧ぐれば必ず其用例を示し其語の標準文語に参照し、附するに必要な方言及び出自を以てしたもので、研究的辭書作成の好模範となるべきものである。單なる實用的辭書の類ではない。況んや附するに文語古語の索引を以てして他學者の檢索の便に供したる用意は感謝に堪へぬものがある。

本書の扱ふ方言は支那語の影響極めて大なるものがあるが、著者が云ふ通り古語往々にして存するものあるは注目すべきである。古ハ行音は喉音或は輕唇音として到る所に殘存するを見るが如きがそれである。著者は博覽の識により之を古文獻に對比してゐる。

序論に掲げ出せる著者の参考書目は完備に近くして、大に初學の参考になる。中に就いて、華夷譯語は瀟芬樓秘笈本と東洋文庫本とを擧げて大同小異なるを注してゐる。正に其通りであるが、序でを以て及べば、この東洋文庫本に續増等の部を増加したものが柯鳳孫藏本であるので、瀟芬樓本東洋本柯氏本の轉展添加の迹をたどり得るのである。至元譯語は事林廣記收載する所である。登壇必究及び武備志に收載する北虜譯語にも涉つてゐるが餘り利

用しなかつたらしい。武備志に載する譯語は二種あつて、第一種は登壇必究所收と同じであり、第二種は著者が推定せる如くボズドネエフ蒙古文學史に載する所のものである。たゞ武備志の方が少し錯簡と誤脱がある様だ。

我國に於ける蒙古語學は今方に時運に促されて飛躍せんといつある。従つて其根柢となるべき研究が極めて必要である。我國に於て此書の如き方言辭書が續出せん事を期待したい。

(石濱純太郎)

ゴルツ獨逸農業史 一十九世紀一

山岡亮一譯

昨一九三七年、吾々はドイツ農業史に關するフォン・ペーロウの遺稿がリュトゲ教授の監輯によつて發表された喜びを有つことが出來たのであるが(本誌第二十三卷第四號紹介欄参照)、今また故ゴルツ教授の農業史の一部が本學經濟學部講師山岡亮一氏の數年の苦心によつて吾々の言葉に移されることが出來たのを見て、喜びの念を禁ずることが出來ない。

原著 Theodor Freiherr von der Goltz: Geschichte der deutschen Landwirtschaft, 2 Bde. (1903-1903) の取扱ふところは、先づ第一卷に於いて、原始時代より十八世紀末に至るドイツ農業史、次いで第二卷に於いて、十九世紀初頭より一八八〇年に至るまでのドイツに於ける農業上の諸種の變革並びに農學の發展であるが、本譯書はその中の第二卷を全譯したものに他ならない。